

「蠟燭と詩人」——イクバルのウルドゥー詩 (8) ——

松村 耕光* 訳

はじめに

本稿は、ムハンマド・イクバル (Muhammad Iqbal 1877-1938) の第1ウルドゥー詩集『鈴の音 (*Bāng-e Darā* 1924年)』に収められた詩「蠟燭と詩人 (*Sham‘a aur Shā‘ir*)」の全訳である。

本詩は、1912年2月に作られ、4月16日、ラホールで開催されたイスラーム擁護協会 (*Anjuman-e Himāyat-e Islām*) 第27回年次大会でイクバル本人により朗唱された。イクバルの詩を聞こうと1万人もの聴衆が集まっていたという。

著名なムスリム・ジャーナリスト、ザファル・アリー・ハーン (*Zafar ‘Alī Khān* 1873-1956) はこの詩を1万部印刷し、1部8アンナで販売した。売上金でイクバルをイスラーム布教のために日本に派遣しようと彼は計画していたが、実現しなかった。

本詩についてイクバルは、朗唱の前にこう述べている。

「私の今日の詩は総合的な詩です。さまざまな問題が描写されると同時にその解決策も示されています。この詩を二つの方向から見てください。第一に詩的側面から、第二に解決策の提案として。どうかよく検討してください。イスラームの名誉を高めるために全力で奮闘してください¹⁾。」

本詩は、11連で構成されており、詩人の質問 (第1連) に蠟燭が答える (第2連～第11連) という、イクバルが好む対話形式になっている。ムスリムの墮落を嘆く、1911年のウルドゥー詩「不満 (*Shikwah*)」とムスリム復興への解決策を示した、1913年のウルドゥー詩「不満への回答 (*Jawāb-e Shikwah*)」を合わせたような作品で²⁾、イクバルの代表作の一つに数えられている。

* 大阪大学大学院言語文化研究科教授

1) Raft‘ al-Dīn Hāshimī, *Iqbal kī Tavīl Nazmēn: Fikrī aur Fannī Mu‘āla‘ah*, Lahore, 1985, p. 68.

2) 本誌第5巻1-2号 (2012年) と第6巻 (2013年) の拙訳を参照されたい。

蠟燭と詩人

詩人³⁾

昨夜、荒れ果てた我が家の蠟燭に向かって私は言った
蛾の羽はおまえの毛を梳る櫛である、と⁴⁾
私は荒野で輝くチューリップのような存在である
宴にも家にも縁がない
長い間おまえのように我が身を燃やしてきたが
私の炎の周りを回ろうとした蛾は一匹もない
見果てぬ夢を追い求める我が心には幾筋もの光がきらめいているのに
この宴にはそれらを見ようとする狂った心は一つとして存在しない⁵⁾
おまえは世界を照らすその光を何処で手に入れたのか
おまえは取るに足らぬ蛾にすらモーセの情熱を教えた⁶⁾

蠟燭

私には死の知らせである波打つ息によって
おまえの口は歌を歌う
私が燃えるのは燃えるのが私の天性であるからである
しかしおまえは蛾を引き寄せようとして輝く
私が泣くのは胸に涙が溢れているからであるが⁷⁾
おまえが泣くのは薔薇園で名声を得るためである
一晚中流した血で私の朝は赤薔薇であふれるが⁸⁾
おまえの明日はおまえの今日とは無関係である
輝いてはいるが、おまえの心は燃えてはいない
おまえの炎は荒野で輝くチューリップのようなものである
考えてみよ、酌人と呼ばれることが自分にふさわしいかどうか
人々は酒を欲しがっているのにおまえの盃には酒がない
おまえはイスラーム共同体のしきたりに従っていない
おまえの醜さのせいでおまえの鏡は評判を落としている
カアバ神殿の横にしながら偶像寺院に恋い焦がれるとは
おまえの一途な思いは錯乱を極めている

3) 「詩人」の部分はすべてペルシア語。

4) 蠟燭の周りには常に蛾がいるということ。

5) 理解者が一人もないということ。

6) 「モーセの情熱」 神の姿を見たいという情熱。

7) 蠟燭の流れる蠟を涙に見立てている。

8) 一晚中光り輝いたおかげで美しい朝を迎えることができるということ。

おまえの宴にカイスは生まれない
おまえの砂漠は狭く、籠の中にライラーは坐っていない⁹⁾
輝く真珠よ、波に抱かれて育った真珠よ
おまえの海は嵐の歓びを知ってはいない
今頃歌って何になる——おまえの薔薇園は荒れ果ててしまった
おまえの歌声は場違いであり、時季外れである

恋しい人の姿を見たいと願っていた者たちはいなくなってしまった
今更逢瀬の約束をもたらし何になる
宴から強い酒を好む馴染の客たちは消えてしまった
酌人よ、今頃強い酒を持ってきて何になる
ああ、薔薇園が荒れ果てた今
そよ風が薔薇に春の到来を知らせたところで何になる
一晩中待ち続けた男の最期の身悶えは見ものであった
明け方になってあの人が屋上に姿を見せたところで何になる
蛾が焦がれていた炎は消えてしまった
今頃炎を恋慕う者が現れたところで遅いのである
おまえが歌おうと歌うまいと薔薇にはどうでもよいことである
出発の合図があろうとなかろうと隊商にはどうでもよいことである

宴の蠟燭であるのにおまえには炎がなかった
おまえの蛾は炎の歓びを知ることはなかった
友愛の糸で結び合わせることができたのに
おまえの数珠玉は何故散乱しているのであろうか
結果を恐れぬ意欲も天翔る思考もなくなってしまった
おまえの宴には狂人もいなければ賢人もいない
燃え立つ心もなく、炎を飲み込む勇気もない蛾など
蠟燭の周りにいたところで何になる
おまえが酌人であるとしても、誰に酒を飲ませるつもりなのか
酒を飲む者はおらず、酒を飲ませる場所もない
昨日まで人々の間に盃を巡らせていた酌人を
割れた酒壺が思い出して泣いている
今、狂気を育んでいた砂漠は——
ライラーやライラーを愛する者たちが踊っていた砂漠は静かである
ああ、隊商の荷物がなくなってしまった
隊商の心から損失の感覚すらなくなってしまった

9) カイス (Qais) とライラー (Lailā) はアラブの有名な悲恋物語の登場人物。カイスとの仲を引き裂くためにライラーの父はライラーを別の男と結婚させ、ライラーはラクダの背に付けられた籠に乗って婚家へと向かった。カイスは狂人となり、砂漠をさ迷った。このためにカイスはマジュヌーン (Majnūn 狂人の意) とも呼ばれる。

かつて荒野を活気づかせていた人々の町は
減んでしまい、跡形もない
一神教の栄光を確立した祈りの声は
インドではバラモンへの供物となった
法を遵守してこそ永遠の歓びを得ることができる
波にとって自由は悲嘆の原因となった¹⁰⁾
神がその御姿を見せたいと思われた者の目は
谷の右側の光に希望を持たないようにしてしまった¹¹⁾
薔薇園を飛び交っていた数千羽もの夜鶯^{フルフル}は
何故巢に籠ってしまったのであろうか
空一面に輝き、目を眩ませていたのに
稲妻は今や積み上げられた麦藁の片隅でくつろいでいる
血涙をしぼる目は薔薇園の世話になるであろうか
とめどない血の涙のせいで視界が真っ赤になっているというのに
しかし悲嘆の夕刻は祝祭の朝の到来を告げている
夜の暗闇に一筋の希望の光が差し込んでいる

ヒジャーズの酒場の酌人よ、良い知らせがある¹²⁾
馴染の客たちがやっと正気に戻った
自尊心と引き換えに外国の酒が買われていたが
またおまえの店が繁盛するようになった
インドの、月のように美しい者たちの魔法が解けようとしている
ふたたび美女スライマーの目が恋を誘っているのである¹³⁾
「酌人よ、国産の酒を持ってこい」と再び人々が言うようになった——
「西欧の酒は心の熱狂を鎮めてしまった」
さあ、歌うがよい——黙っている時ではない
早朝の空が陽の光を受けて輝き出している
他人^{ひと}の悲しみに胸を痛め、他人の悲しみに胸を痛めさせよ
私は真理を語った——耳があるなら聴くがよい¹⁴⁾
詩は預言のようなものであると言われている
さあ、イスラーム共同体の宴に天使の言葉を聞かせるがよい
逢瀬を約束して目を開かせ
選りすぐられた言葉の熱気で心を蘇えさせるがよい

おまえは安楽を望んで勇気を失った
おまえは砂漠の大海であったのに薔薇園の小川と成り果てた

10) 海から離れようとする波の音が嘆きの声のように聞こえるのでこのような表現をしている。

11) 「谷の右側の光」 神の光を意味する。コーラン、「物語の章」30節を参照。

12) 「ヒジャーズの酒場の酌人」 イスラームの預言者ムハンマドを指していると思われる。

13) スライマー (Sulaimā) はアラブ女性の名で、アラブの、本来的なイスラームを意味している。

14) この対句はペルシア語。

本来の姿を保っていた時、結合があった
薔薇を離れ、芳香の隊商は散り散りになってしまった
水滴は生の秘密を教えてくれる
真珠、夜露、涙となって¹⁵⁾
心を生み出すよう努めよ——これは大きな財産である
心を欠いた人生など何になる
イスラーム共同体が結合を保っていた時、おまえには名誉があった
結合が消え、おまえは世界の笑いものとなった
共同体と結びついていてこそ個人であり、一人では何者でもない
海があってこそ波であり、海の外では何物でもない

胸の奥に愛はまだ秘めておくがよい
酒壇のように酒を辱めてはならぬ¹⁶⁾
モーセのようにシナイの谷に天幕を張り
探求の炎で家を焼くがよい¹⁷⁾
蠟燭に迫害の報いがあることを知らしめるために
白い灰となった蛾で夜明けをもたらすがよい¹⁸⁾
自尊心があるなら、酌人の世話になってはならぬ
海にいても泡のように盃は伏せておくがよい¹⁹⁾
昔ながらの山や砂漠にはもはや面白味がない
おまえの狂気は目新しい——さあ、新しい砂漠を生み出すがよい
運命がおまえを地中に埋めてしまったら
種子のように支えを生み出すがよい²⁰⁾
さあ、昔の枝にまた巣を作るがよい
薔薇園の者たちを素晴らしい歌でうっとりさせるがよい
この薔薇園では、夜鶯か薔薇の弟子になる他はない
嘆くか歌わないでいるかしかない
何故おまえは滴る露のように薔薇園で音を立てないでいるのか
口を開くがよい——おまえは世界の楽器が奏でる調べなのである

農民よ、自分の本質を悟るがよい
おまえは種子であり、畑である——雨であり、収穫物である
ああ、おまえは何を求めてさ迷っているのか
おまえは道であり、旅人である——道案内であり、目的地である

15) 詩では真珠は雨滴が変化したものとされる。

16) 酒壇のように酒を外に見せてはならないということ。

17) 伝統を墨守することなく、真理を探求せよということ。

18) ここでは蠟燭は迫害者、蛾は被害者を意味している。朝になり、消されることが蠟燭が受ける——蛾を焼き殺したことに対する——報いである。

19) 泡は伏せられた盃のような形をしている。

20) 植物の茎を支えと表現している。

何故嵐を恐れておまえの心は震えるのか

おまえは船頭であり、海である——船であり、岸である
上着を引き裂いた者たちの街を覗いてみるがよい²¹⁾

おまえはカイスであり、ライラーである——砂漠であり、籠である
何ということであろうか、おまえは酌人を必要とするようになってしまった

おまえは酒であり、酒壇である——酌人であり、酒宴である
炎となり、神以外の雑草を焼き払うがよい

何故悪を恐れるのか——おまえは悪の破壊者である
無知な者よ、おまえは時の鏡の輝きである

おまえはこの世界の、神の究極の言葉なのである

愚か者よ、自分の本質を知るがよい

水滴に過ぎないが、おまえは無限の大海でもある
何故おまえは劣等感に呪縛されているのか

嵐の猛威を孕んでいることを悟るがよい
おまえの胸は、宇宙の秩序の中に見え隠れするあの御方の²²⁾

貴重な御言葉を保管している
武器なしで全世界を征服する手段を

よく考えてみよ——おまえは持っているのである
ファーラーンの山の沈黙が今まで証してきた誓約を²³⁾

おお、愚か者よ、おまえは覚えているか
愚かにもおまえはわずかな蕾に満足してしまった
薔薇園には不如意を解消する方法があるというのに
胸の内が言葉の幕に映し出される

酒壇を通して酒が透けて見えている
燃え上がる私の歌声は私を燃やし尽くしてしまったが
この歌声こそ私の全財産である
この燃え上がる歌声の秘密を私の胸の中に見出すがよい
輝く運命を私の心の鏡の中に見出すがよい

空は朝日を受けて鏡の衣を纏い

夜の暗闇は水銀玉のように転げ去るであろう
春風は歌声を生み出すであろう

蕾で眠る芳香すら歌声となるであろう
薔薇園の、胸を引き裂かれた薔薇は胸を引き裂かれた他の薔薇と交わり²⁴⁾
朝のそよ風は薔薇の友となるであろう

21) 引き裂かれた上着は狂恋者のしるし。

22) 「あの御方」 神のこと。

23) 「誓約」 イスラームの教えを守り、広めるという誓約。ファーラーン (Fārān) は、メッカ近郊の山の名。

24) 「胸を引き裂かれた薔薇」 薔薇の花弁の重なりが引き裂かれた胸のように見えるのでこのような表現をしている。

私の流す露^{なみだ}は心を溶かし
この薔薇園の蕾すべてが情け深くなるであろう
おまえは川の勇壮な流れの結末を見るであろう
荒れ狂う波こそがその足枷となるであろう
再び心は礼拝の教えを思い出し
額は聖地の土と親しむであろう²⁵⁾
猟師の嘆きは鳥を歌わせ
薔薇を手折る者の血で蕾は真紅の衣を纏うであろう
目にしていることを口にするのは難しい
世界がどうなるのか、驚いて見ている他はない
太陽の輝きで結局夜は消え去るであろう
花園には一神教の歌声が満ち溢れるであろう

25) 礼拝時に額づくので額に土がつく。